別紙様式

「ことばの教育」パイロット校事業　報告書

学校名	尾道市立因北小学校
校長名	平尾　俊治
所在地	尾道市因島中庄３３２２
ＨＰ	http://wwwinhoku-e.hiroshima-c.ed.jp/
学級数	１３学級
タイプ	Ⅰ　・　Ⅱ

１　研究の概要

（1）研究主題

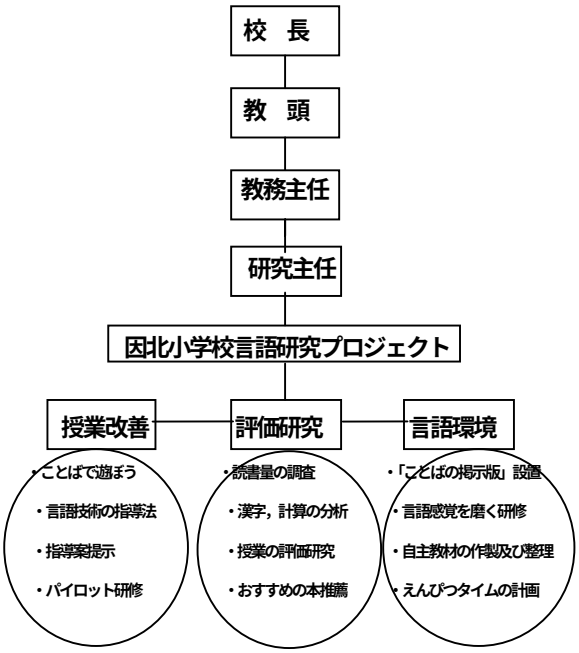
生きてはたらくことばの力の育成
～活動目標を位置づけた文学教材の授業改善を通して～

（2）研究のねらい

本校では「生きてはたらくことばの力」を，相手，目的や意図，多様な場面や状況などに応じて「適切に表現する力」と「的確に理解する力」ととらえている。その中でも国語科では，「読むこと」の領域に課題の大きい児童の実態をふまえ，初年度は「初めて出会う文章（新しい文章）を目的に応じて的確に読み取る力」の育成に焦点をしぼり，読書活動を位置づけた文学教材の授業改善を通して研究を深めてきた。

研究２年目の本年度は，初年度の取組みをさらに発展させながら，「言語技術」の活用を系統的に位置づけていくことで，児童の「読むこと」の力の育成を図っていくこととした。

（3）研究組織・体制



「一人一役」を目指し，言語研究プロジェクトを組織している。毎月１回のプロジェクト研修を担当する。

２　２年間の取組みの概要

（1）研究仮説

①仮説１

国語科の授業において，「言語技術」を取り入れた「書く」活動や「対話」活動を仕組めば，目的に応じて的確に読む力がつくであろう。

②仮説２

総合的な学習の時間において，「言語技術」を効果的に活用できるように単元構成を工夫すれば，生きてはたらくことばの力が育ち，学び方やものの考え方を身に付けることができるであろう。

（2）具体的取り組み

①仮説１について

・「言語技術」を組み入れた学習指導案の作成
・帯タイム等で学んだ「言語技術」を他教科全般に生かす

②仮説２について

・「言語技術」の年間計画を立てて指導する。
・「ことばの教育」年間計画に基づいて言語活動の実施
・教師の言語感覚を磨く研修の実施

（3）実践事例

国語の授業における「言語技術」の活用

○児童が自らの「読み」を表現する手だてとして「書く」活動を重視した。そのときに，「言語技術」を活用した「型（モデル）」を示すことで，児童は学習のねらいに沿った「読み」を表現することができた。また，書くことに抵抗のある児童にとって，この「言語技術」の活用は大変有効であった。

○１学期には，「書く」活動において，次のような「言語技術」を活用することができた。

学　年	「　書　く　」　活　動	主に活用した「言語技術」
１　年	人物の役になってふきだしを書く	視点を変える技術→登場人物の立場に立つ
２　年	スイミー応援歌の題を書く	視点を変える技術→登場人物の立場に立つ
３　年	人物の紹介をキーワードで書く	絵の分析の技術→人物像をとらえる
４　年	人物の人柄をキーワードで書く	問答の技術→人物像に迫る
５　年	テストの問題文と解答文を書く	問答の技術→主述の照応・根拠の整合
６　年	場面のマップタイトルを書く	情報整理の技術→主題をとらえる
なかよし１	絵本に入れることばを書く	絵の分析と物語の構成の技術→お話作り
なかよし２	楽器の音を表す言葉を書く	問答の技術→根拠をもとに言葉を作る
なかよし３	なぞなぞカードにヒントを書く	問答の技術→ナンバーリングの活用「ヒントは□つあります。１つ目は・・・」

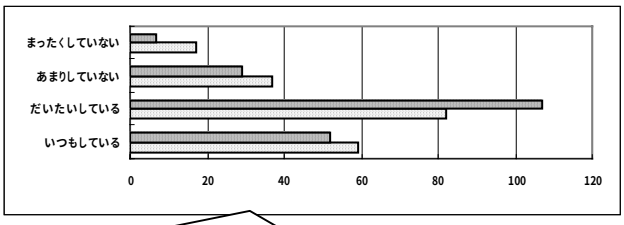
３　研究の成果と課題

（1）検証結果

①「ことばの教育」に関する意識調査から

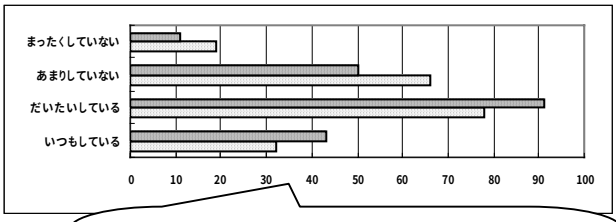
（１８年度　　１７年度　　）

○自分が一番伝えたいのは何かを考えながら書いています。



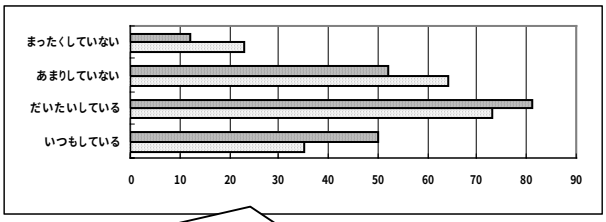
肯定的評価が前年度より１２%アップした。調べたことをまとめるときに情報伝達の技術が生かされている。

○なぜ，そう考えるのか理由をつけて書いています。



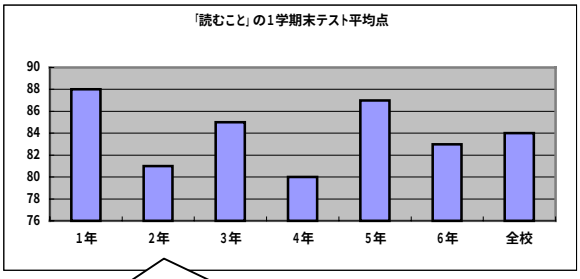
肯定的評価が前年度より２１%アップした。意見の根拠をまとめるときに問答の技術が生かされている。

○相手にわかりやすいように順序に気をつけながら書いています。



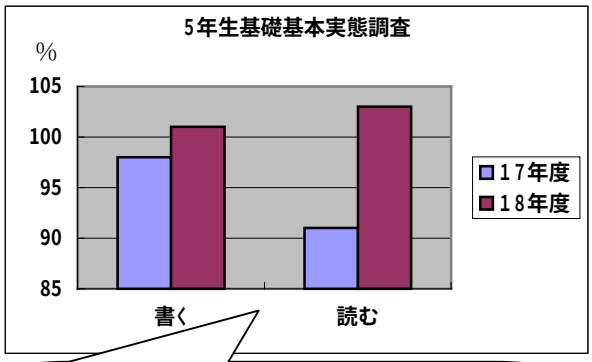
肯定的評価が前年度より２１%アップした。調べたことをまとめるときに情報伝達の技術や問答の技術（ナンバーリング）が生かされている。

②「読むこと」の評価テストから



全校の平均点は８４点で，期待得点の８０点を５%上回っている。

③5年生「基礎・基本」定着状況調査から



初めて出会う文章に対して，どのように対処してよいのか，また，文章全体の構造をつかむことが難しかった。しかし，「言語技術」を習得することにより，物語の構造分析や再話によって書く力や読む力がついてきたと考えられる。

（2）成果と課題

【成　　果】

①活動目標の設定による単元構成の工夫を通して，児童が主体となって取り組む授業が展開されたことで，児童の「読むこと」の学習に対する意欲が向上した。
②「言語技術」を「書く」活動において活用することを通して，児童が自らの読みを目的に応じて表現することができ，文章を的確に読む力が向上した。
③「読み」の交流の手だてとして「対話」活動を位置づけ，そこに「言語技術」（問答の技術）を活用することを通して，ことばを根拠に読もうとする児童が増えた。
④総合的な学習の中に必要な技術を取り入れながら指導したことで，すぐに授業の中で生かし，情報整理に役立てることができた。

【課　　題】

①情報整理の技術の向上を
・集めた情報を整理分類するときに，どんな項目で整理するのがいいかを考える「ラベリング」の力をつける。
②認知の技術の向上
・事実と意見を区別する力をつける。
・事例についての演習を増やす。
・パネルディスカッションやディベートなどの討論を増やす。

（3）今後の改善方針

○えんぴつタイムを書くことの時間として位置づけるとともに，チャレンジタイム（帯タイム）の中にも「言語技術」の指導を取り入れる。
○「言語技術」」の系統的なカリキュラムを参考にしながら，来年度からも「言語技術」の指導を継続していく。
○習得した「言語技術」をどのような場面で取り入れたのか共通に理解し，系統的な指導に役立てる。